

第3回渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会 資料-4

第2回渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会指摘事項概要

日時:平成23年3月7日(月) 10:00~12:00

場所:栃木市藤岡遊水池会館 中会議室

| 議事 | No. | 委員指摘事項（内容） | 対応（回答） |
|----------------------|-----|--|---|
| 3.第1回委員会指摘事項対応について | 1 | No.9で「地下水が低下」とあるが「地下水位が低下」と用語を統一した方が良い。 | ご指導の通りとする。 |
| 4.全体施工計画と現在の進捗状況について | 2 | 湿潤環境形成実験池の棚田はいずれスロープになるように念頭に入れておいた方が良い。 渡良瀬をみていると浅い水面に続くなだらかなスロープに鳥が集まっている。 | 施工後は、自然の応答に任せるようにする。 |
| | 3 | 鳥を目的とした場合、実験地の面積が重要である。最低でも2haは欲しい。 (事務所説明を受けて)湿潤環境形成実験地は10haくらいあるので期待が持てる。 | 事務所より各実験地のおおよその大きさ(縦横の長さ)を説明済み。 |
| | 4 | 地下水は年間を通して変動するが、計画図面の水位はどのような考え方か。 | 年平均水位を想定している。最低水位とすると相当深く掘削することとなる。水位の低下する冬季にある程度干出することは仕方がないと考えている。 |
| | 5 | 土質はどうなっているか。水はたまりやすいのか。 | 砂層と粘土層が互層となっている。 掘削箇所の掘削深とその土質で水のたまり具合は異なると考えられる。 |
| | 6 | 地下水の挙動は土質によっても影響を受ける。”掘削された場所に周囲の地下水がひっぱられる”という関係だけでなく、土質の条件も含めて地下水の挙動について検討していく必要がある。 | 環境学習フィールドやその他の新規実験地でのモニタリング結果を分析していくことである程度関係性について知見が得られると考えている。また、今後掘削してからご相談させていただきたい。 なお、地下水観測井戸設置の際に深度別の土質を概略的に確認しており、考察に反映していく。 |
| | 7 | 湿潤環境形成実験地の棚田は、畦を作るイメージならば、実際の棚田の作り方を参考にするのが良い。 植物のデータが取れた後は鳥類等のデータもみていくことが必要である。 その際は、実験地の面積を広げるなどの工夫が必要である。 | 渡良瀬遊水地の平均地盤高は14.5m、与良川の平均水位は11.8~12.0mなので、かなり緩い傾斜となり、見た目にはほとんどわからないくらいになると思う。 実際の施工は試行錯誤でやっていくことになるので、今後とも委員のご指導をお願いしたい。 |
| | 8 | 降水と地下水との関係を把握することは非常に重要なので、アメダスだけでなく現地のデータを取ることができないか。 | 藤岡出張所で降水量のデータを取っているので利用できる。 |
| 5.モニタリング計画について | 9 | 地盤沈下はあるか。 | データを確認したところ、近年は落ち着いてきている。 |
| | 10 | 降雨量と表記されているが、降水量とするべき。 | ご指導の通り修正する。 |

| 議事 | No. | 委員指摘事項（内容） | 対応（回答） |
|-----------------|-----|--|--|
| 6.環境調査の現況報告について | 11 | 鳥類の調査で、ねぐら調査や標識調査がある。渡良瀬では山階鳥類研究所がバンディング調査をしている。 詳しいデータが取れるので将来的に検討してみてはどうか。 | 動物調査の中での実施を検討する。 |
| | 12 | 動物調査で調査主体と調整はあるが、具体的に決まっているのか。 | 予算の関係もあり、具体的には決まっていない。 NPO等からの提案をいただいて、足りないところを事務所が補足することなどを考えている。 |
| 6.環境調査の現況報告について | 13 | 湿生草地再生実験地は、外来種対策が重要なテーマであることを確認できたことに意味がある。 望まない方向に行った場合どうするかを検討する必要がある。 | 湿生草地再生実験地で、セイタカアワダチソウの刈り取りと冠水による抑制の実験を行ったが、始めたばかりであり効果が確認できていない。実験を継続していく予定である。 なお、今年度調査では冠水によりセイタカアワダチソウが枯死する傾向にあり、冠水頻度を高くすることで本種の繁茂を抑制可能と考えられる。 |
| | 14 | セイタカアワダチソウの刈り取りは、5月頃に3年くらい継続することで効果が表れるという東大の報告があり、長期的にみる必要がある。 冠水は、現地でみるとセイタカアワダチソウの成長を抑制しているように見える。 試験結果からみると、外来種が増加するのは確実なので、セイタカアワダチソウの対策を今後も継続して聞くことが必要。私も協力していきたい。 | 委員の先生方のご意見をいただきながら、実験を継続して今後も検討を進めていく。 |
| | 15 | 冠水によって他の重要種にマイナスの影響が出ないように注意することも必要である。 | — |
| | 16 | 現在の現況調査の調査頻度（植物相調査：年3日、重要種補足調査：年4日）の精度では、十分に出現する植物が網羅されていない感じる。現地を踏査しているときにウスグチョウジタデ、マルバノサワトウガラシ等を見かけたが、リストからは漏れている。このような基礎資料が最も大事である。 | 予算との関係もあるので、他の調査項目とのバランスを考えて検討する。（事務所確認） |
| | 17 | 付属資料の地下水位の経時グラフに、降水量の併記がほしい。 地下水は浅井戸と深井戸があるが深さはどの程度か。一般的に浅層地下水は降水と連動するが、深層地下水は周辺の揚水が影響する。 | 地下水位の整理にあたっては、降水量もあわせて整理する。 浅井戸、深井戸ともに、場所によって深さが異なっているが、おおよそ、浅井戸は5～7m程、深井戸は20m未満程である。 |
| その他 | 18 | 2010年10月から月1回の割合で観察会をしている。猛禽類ではノスリが最も多い、ついでチュウヒが多い。 チュウヒは2000年以降、日中の活動個体が減っている。これは渡良瀬でヨシ刈りが行われなくなつた時期と一致している。狩場の喪失によるものであろう。チュウヒのためにはヨシ群落と裸地を創出することが必要である。 | — |